

人生にはやはり思いがけないことが多い。多忙な日常の合間を縫って、このところ私は、郷里の信州松本に帰省する週末が続いていた。六月初旬に二十三回忌を迎える父が生誕かけて書き残した膨大な量の日記を、その日までになんとか読み終えようと決意したからである。その折のこの四月二十二日の日曜日のことであつたが、私はついにわが家の祖先の墓を探し当てた。こんな書き方をすると、いささか奇異に思われるであろうが、それには若干の理由がある。

父は、ごく幼少の頃、わが家の墓地のある大松寺に隣接するやはり女鳥羽川畔の、いまは荒れはてた鐘樓のみを残す廃寺・念来寺の墓に祖先を

仏毀釈(はいぶつきしゃく)の折に、全国でももっとも徹底的に寺が打ち壊された地域の一つだという旧松本藩最古の仏教文化財である。当時は

六の小説「大番」の登場人物で松本から上京して明治後期

腹を差けたという、わが家の三代前の分家筋の中嶋豊次郎

と、三基のうち二基はもう大分傾いてはいたが、文化、文政から弘化、嘉永を経て明治にいたるわが祖先の墓石が

「中嶋」の姓もくつきりと現存しているではないか。ついに見つけ出した

女鳥羽川の辺

中嶋 嶺 雄



たまたまある偶然からわが家の遠い親戚筋の古者が中嶋家祖先の位牌の一部を保存しているらしい

その日私はそのS家を訪ねたのであつた。すると、S

家には獅子文

そほ降る雨の中で私は、時の流れに抗(あらが)つて残っていたわが祖先の墓石を

中心を流れる女鳥羽川(めとばがわ)に面した大松寺に六年前の夏、念来寺を訪ねて探したこともあつたが、やはり地方の曹洞宗の名門・全久院の檀家でもある。従って、二つのお寺にお世話になつて

たまたまある偶然からわが家の遠い親戚筋の古者が中嶋家祖先の位牌の一部を保存しているらしい

その日私はそのS家を訪ねたのであつた。すると、S

家には獅子文

そほ降る雨の中で私は、時の流れに抗(あらが)つて残っていたわが祖先の墓石を

「中嶋」の姓もくつきりと現存しているではないか。ついに見つけ出した

或る発見



穂高連峰

一市井人の昭和史

私の父は昭和初年から昭和

四十二年六月の死の二日前まで、実に丹念に毎日の日記をつけていた。貧窮のなかで育った父が一人前の庶民としてみずからの生業（薬局経営）の道を固め、晩い結婚を果たした三十代初期からであり、当初は俳句日記のかたちをとっている。いわば歳時記風に日記をつけ始めたのである。しかし、そのうちに商売の様子とはもとより、町内の模様、祭や市のこと、当時はごく手軽な保養と湯治の場であった浅間温泉の情景、家族・親戚・隣近所の日常、そして一人ツ子の私が生まれてから

はわが子の成長についての克明な記録となり、ときには政局・戦局・時局にも触れていて、一市井人の昭和史、山国

の城下町・松本の風俗史として見れば大層なものだと感心させられる。

父は、俳句の道に励んでいた一種の地方文化人でもあったので、女鳥羽川を背にした

松本市中町のわが家には松村巨湫（「樹海」主宰）、栗生純夫（「科野」主宰）のよう

女鳥羽川の辺

中嶋 嶺雄

な右橋系の俳人や歌人の若山喜志子先生（牧水夫人）などがよく来宅された。わが西洋

画界の泰斗・石井柏亭画伯や

夭折した信州日本画壇の鬼才

・山口蒼輪氏、私も絵を教え

ていただいた日本水彩画会

の白山卓吉先生、山岳画家の古

本市幸利先生らが出入りされた

り、父と親交をもったりして

満91歳の鈴木先生

松本在住の文化人といえ

ば、私がヴァイオリンを教え

ていただいた鈴木鎮一先生を

入った真町にあった。父はそ

の松本音楽院のPTA副会長

もつとめていたことを私は父

の日記で今回確認した。当時

の鈴木教室にかんする細かな

メモや音楽院

まことに今昔

の感がある。

十一歳の現在もおお壮年のよ

うな若々しさでおられるけれ

ど、今日、世界に知られる

入退院をくりかえした頃か

父の中の日記

録となっていて、一度生死の

はさまをさまよったときの記

述など、そのリアルな描写

に圧倒される。

死の一年半前の昭和四十

年十二月には、この日記われ

たのであろうか。



私のヴァイオリン

のちに公表されることを意識

して書き残すかもしれない。

しかし、そのような機会もあ

らうはずのない父が、なぜか

くも律儀に日記を綴りつづけ

たのであろうか。

父の日記の完読を決意したの

であった。

思わずたじろいだ

その父は、日記の随所であ

ふれるばかりの愛情を私に注

いでくれているのだが、その

父にして、昭和十九年七月七

日のページでは、「支那事変

発生より七周年、……やがて

は嶺雄も召されて征く日がく

る。サイパン島、小笠原島ま

で敵は進攻して来てゐる。」

と書いている。この父にして

こう書かした戦時下の父の

心理とその非情の筆致に私は

一瞬ギクリとし、思わずたじ

ろいだったのであった。

（東京外語大教授・国際関

係論、給も）

の唯一の命とす」という句も

日記の端に記されているが、

ともかく約四十年にも亘（わ

く、自分の息子、つまりこの

たって毎日これだけの日記

を書きつづけたその志には、

判然とした。その私がかもし

われながら敬服せざるを得な

このまま父の日記を読まなけ

れば、強い志に支えられた一

柳絮舞ふ河岸をゆくなり萩
売り

（『共同句集すががき』より）

右の句は、私の父が昭和九年頃に女鳥羽（めとぼ）川畔の光景を詠んだものである。信州松本は周知のように北アルプス山麓の城下町で、現在

も市の中心には女鳥羽川が流れているが、柳絮りゆうじよが舞い、萩（わらび）売りの呼び声が聞こえるといった長閑（のどか）な風情からは程遠い。それでも子供頃には、河岸の縄手通りに大道商人が立ち並び、香具師（やし）が大声で客を集めていたりして、四囲の山並みとともに、俳句の題材には事欠かない環境であった。

気にかかっている

私は、俳句には素人であるけれど、子供の頃から可愛が

っていた父の俳句の師 関女工として句作を始め、進んで松村巨湫先生のこと
が、ずっと気にかかっている。わが家にもしばしば来訪された巨湫先生の色紙や短冊が数多く残っているからかもしれないが、どうもそれだけではなさそうである。

松村巨湫（一八九五—一九〇七）に集う父のような叙
「樹海」に集う父のような叙
期の同人は、

女鳥羽川の辺

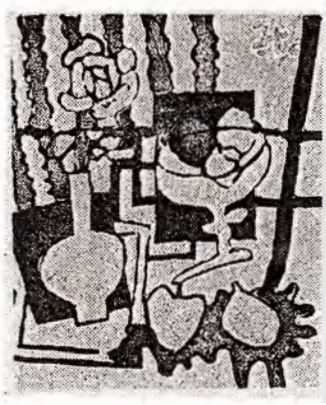
中嶋 嶺雄

六三）と言っても、今日の俳壇ではほとんど忘れ去られた存在であろう。「現代俳句大辞典」（明治書院）などを編む、人間中心のリアリズムを（ひもと）いてみても、二、三の句と異色の女流俳人・鈴木しづ子を生んだことぐらいしか記されていない。たしかに、鈴木しづ子は、戦後、製

景・抒情型の同人のあいだを、人間中心のリアリズムを代俳句表現辞典」（貧文堂、昭和三年）に導かれてその門をたたき、初期の俳誌「清淨集」（父は一時その編集発行人であった）に集い、のちに東京・田端の巨湫塾に参じた

俳匠・巨湫先生

門弟であった。父の手許に残された昭和三年刊の『石楠自選句集』には、「薄つべらなうな分ち書きの晦淡な」は「醇化（じゅんか）の足りな理想」といった巨湫先生の父を含めて巨湫門下の同人



卓上のオブジェ（版画）

清貧の生涯閉じる

達筆の朱の書き込みが随所に残っていて、当時から巨湫先生はその師・白田亜演麾下の「石楠」一門の作風にはかなり批判的であったようである。これが巨湫晩年の「格は論や意味論にまで手を染められた晩年の巨湫先生を私は知っているけれど、今は亡き俳人・楠本憲吉氏が「すべてを投げ打つ精神で、とにかくこまで来た」（『俳句苑』巨湫追悼号、昭和四十年八月）と述べていたのは、精一杯の巨湫擁護論であったろう。

東京浅草に生まれ、大阪の薬屋に奉公したのち、俳句を志して上京、いかなる定職に就くこともなく俳句一筋に生きた巨湫先生は、こうして孤立無援のなかで、間借り住まいの清貧のうちに、まさに「俳匠」と呼ぶにふさわしい生涯を閉じたのである。

今、わが家には、巨湫先生が女鳥羽川畔の風景を詠んだ色紙が壁に掛かっている。（東京外語大教授・国際関係論、版図も）